

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修 士 論 文 概 要 書

論 文 題 目

ナ行音・ラ行音の知覚・生成混同における母方言の影響

—四川方言の下位方言である成都・重慶方言の差異に着目して—

劉 羅 麟

2017 年 3 月

修士論文概要書

本研究では、若年層の成都・重慶方言話者を対象に、母方言の音韻的特徴が日本語のナ行音・ラ行音の知覚・生成混同にもたらす影響を明らかにした。以下は本論文の流れに沿って、本修士論文の概要について記述する。

◆ 第一章 序論

第一章では、本研究の背景、研究目的、研究意義、本論文の構成を提示した。

まず、本研究の背景として、筆者が本研究テーマに至るまでの経緯、研究動機、問題意識および単音レベルの音声教育の重要性について述べた。筆者自身を含め、中国四川省出身の学習者は、母方言の影響によりナ行音・ラ行音を混同する人が多い。こういったナ行音・ラ行音の混同が発音や聴取以外にも、文字による産出ないし学習意欲など、様々な面に悪影響を及ぼす。しかし残念ながら、四川方言話者のナ行音・ラ行音の混同に関する研究は未だに少ない。そこで筆者はこの問題について関心を持つようになった。そして、先行研究を詳しく調べていく中で、筆者は2点の問題意識が生じた。1点目としては、若年層の方言話者の方言の発音実態に関する把握の不足である。2点目としては、方言内（下位方言間）の差異に関する配慮の不足である。続けて、先行研究の指摘に基づき、コミュニケーション上の問題、学習者の情意面における影響、多様化した学習者のニーズなどの面から単音レベルの音声教育の重要性を唱えた。

そこで、本研究の目的として、「若年層の成都・重慶方言話者の母方言の音韻的特徴が、日本語のナ行音・ラ行音の知覚・生成混同にもたらす影響を明らかにすること」と定めた。それを達成するために、以下のようにリサーチクエスチョン（RQ）を3つ設定した：

- RQ1：若年層の成都・重慶方言話者は方言の/l/・/n/をどのように発音するのか
- RQ2：若年層の成都・重慶方言話者はナ行音・ラ行音をどのように聴取するのか
- RQ3：若年層の成都・重慶方言話者はナ行音・ラ行音をどのように発音するのか

また、これらのRQを解明するために、以下のように3つの調査を実施した：

- 調査Ⅰ：若年層の成都・重慶方言話者の方言の/l/・/n/の生成調査
- 調査Ⅱ：若年層の成都・重慶方言話者のナ行音・ラ行音の知覚調査
- 調査Ⅲ：若年層の成都・重慶方言話者のナ行音・ラ行音の生成調査

そして、本研究の研究意義として、以下の4点を挙げた：①これまで明らかにされていなかった、若年層の成都・重慶方言話者の方言の発音実態を明らかにした基礎研究である。②今まで一括りにされてきた四川方言を更に成都・重慶の下位方言まで細分化した研究である。③それぞれの方言の音韻的特徴を踏まえたうえで、ナ行音・ラ行音の知覚・生成混同における母方言の影響を明らかにした研究である。④本研究の研究成果に基づき、成都・重慶方言話者向けのナ行音・ラ行音の練習方法の提言を試み、今後の指導方法の開発の一助となる基礎研究である。

最後に、本論文の構成を概説し、本研究の全体像を提示した。

◆ 第二章 先行研究

第二章では、本研究に関連する先行研究を概観し、得られた成果をまとめたうえで、本研究の位置づけを提示した。

まず、先行研究からこれまで得られた成果を以下のようにまとめた。①中国語の普通話の音韻体系について概説し、普通話において歯茎側面接近音/l/と歯茎鼻音/n/の弁別があることがわかった。②四川方言における/l/・/n/に関する先行研究および四川方言辞典の記述をまとめ、成都方言は洪音の場合/l/・/n/を弁別せず、細音の場合弁別するのに対して、重慶方言は洪音・細音関係なく/l/・/n/を弁別しないことがわかった。③日本語におけるナ行音・ラ行音に関する先行研究をまとめ、ナ行音は歯茎鼻音あるいは硬口蓋化した歯茎鼻音であり、ラ行音は音環境や個人差によって、はじき音、側面音、ふるえ音の様々なバリエーションがあることがわかった。④中国語母語話者によるナ行音・ラ行音の混同、特に四川方言話者の学習者に関する先行研究の成果をまとめた。

次に、先行研究の成果を踏まえたうえで、問題の所在を2点提示した。1点目としては、四川方言の音韻体系において、/l/・/n/の弁別がほとんどないとされるが、それをどう発音するかに関しては諸説あるため、若年層の四川方言話者の方言発音の実態調査が必要である。2点目としては、成都方言話者は細音の場合/l/・/n/を弁別するのであれば、日本語の「ニ・リ」も相対的に弁別しやすいと推測できる。しかし、下位方言まで細分化し、成都方言話者を取り立てる先行研究は管見の限り存在しない。この2点を明らかにすることは、本研究の位置づけである。

最後に、本論文における用語を定義した。

◆ 第三章 調査Ⅰ：若年層の成都・重慶方言話者の方言の/l/・/n/の生成調査

第三章では、調査Ⅰ「若年層の成都・重慶方言話者の方言の/l/・/n/の生成調査」の調査方法、分析方法および分析結果を提示した。

まず、調査Ⅰの調査目的として、「若年層の成都・重慶方言話者が生成した方言の/l/・/n/の音韻的特徴を明らかにすること」と定めた。これは RQ1 に対応する。

次に、調査協力者の選定基準、調査方法の制定、調査の実施手順、データの分析方法について述べた。

そして、分析結果として、以下の3点を明らかにした。まず、成都方言に関しては、①韻母が洪音の場合、普通話における声母/l/をラ行音に近い音で発音する。一方、声母/n/をラ行音に近い音で発音する場合とナ行音に近い音で発音する場合が混在し、顕著な偏りがない。②韻母が細音の場合、普通話における声母/l/をラ行音に近い音で、声母/n/をナ行音に近い音で発音するという、顕著な傾向を示す。一方、重慶方言に関しては、③洪音・細音に関係なく、普通話における声母/l/・/n/を両方ラ行音に近い音で発音するが多い。

最後に、分析結果を考察し、調査Ⅱおよび調査Ⅲの結果を推測し、本章をまとめた。

◆ 第四章 調査Ⅱ：若年層の成都・重慶方言話者のナ行音・ラ行音の知覚調査

第四章では、調査Ⅱ「若年層の成都・重慶方言話者のナ行音・ラ行音の知覚調査」の調査方法、分析方法および分析結果を提示した。

まず、調査Ⅱの調査目的として、「若年層の成都・重慶方言話者が日本語のナ行音・ラ行音の知覚における特徴を明らかにすること」と定めた。これは RQ2 に対応する。

次に、調査協力者の選定基準、調査方法の制定、調査の実施手順、データの分析方法について述べた。

そして、分析結果として、以下の8点を明らかにした。まず、全体的には、①本研究における成都方言話者と重慶方言話者は、総じて同程度の知覚能力を有する。次に、後続母音別に両グループ間の差を見ると、②後続母音が/a/, /u/, /e/, /o/の場合、両グループの間に差がない。③後続母音が/i/の場合、成都方言話者は重慶方言話者より混同しにくい。続いて、グループ別に後続母音間の差を見ると、④成都方言話者は/a/, /u/, /e/, /o/と比べ、/i/が混同しにくい。⑤成都方言話者は/i/, /u/, /e/と比べ、/a/が混同しやすい。⑥重慶方言話者は

/i/より/a/が混同しやすい。最後に、グループ別に子音間の差を見ると、⑦成都方言話者はナ行音・ラ行音を同じ程度に混同する。⑧重慶方言話者も同じくナ行音・ラ行音を同じ程度に混同する。

最後に、本章をまとめた。

◆ 第五章 調査Ⅲ：若年層の成都・重慶方言話者のナ行音・ラ行音の生成調査

第五章では、調査Ⅲ「若年層の成都・重慶方言話者のナ行音・ラ行音の生成調査」の調査方法、分析方法および分析結果を提示した。

まず、調査Ⅲの調査目的として、「若年層の成都・重慶方言話者が日本語のナ行音・ラ行音の生成における特徴を明らかにすること」と定めた。これは RQ3 に対応する。

次に、調査協力者の選定基準、調査方法の制定、調査の実施手順、データの分析方法について述べた。

そして、分析結果として、以下の7点を明らかにした。まず、全体的には、①本研究における成都方言話者と重慶方言話者は、総じて同程度の生成能力を有する。次に、後続母音別に両グループ間の差を見ると、②後続母音が/a/, /u/, /e/, /o/の場合、両グループの間に差がない。③後続母音が/i/の場合、成都方言話者は重慶方言話者より混同しにくい。続いて、グループ別に後続母音間の差を見ると、④成都方言話者は/a/, /u/, /e/, /o/と比べ、/i/が混同しにくい。⑤重慶方言話者は後続母音に関係なくナ行音・ラ行音を混同する。最後に、グループ別に子音間の差を見ると、⑥成都方言話者はナ行音よりもラ行音のほうが混同しやすい。⑦重慶方言話者はナ行音・ラ行音を同じ程度に混同する。

最後に、本章をまとめた。

◆ 第六章 総合的考察

第六章では、第三～五章で述べた調査Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの調査結果に基づき、総合的に考察を行った。

まず、調査Ⅰ、Ⅱの調査結果を踏まえて、成都・重慶方言の音韻的特徴がナ行音・ラ行音の知覚混同にもたらす影響について考察し、以下の4点を明らかにした。まず、成都方言に関しては、①洪音の場合/l/・/n/の弁別がなく、細音の場合のみ/l/・/n/を弁別するため、

日本語のナ行音・ラ行音の知覚においても後続母音が/i/の場合、ほかの後続母音よりも混同しにくい。②/l/・/n/をラ行音に近い音で発音する場合と、ナ行音に近い音で発音する場合が混在するため、ナ行音・ラ行音を同じ程度に混同する。一方、重慶方言に関しては、③洪音・細音に関係なく/l/・/n/を弁別しないため、日本語のナ行音・ラ行音の知覚においても後続母音に関係なく混同する。④/l/・/n/をラ行音に近い音で発音する場合が相対的に多いが、ナ行音に近い音で発音する場合も存在するため、ナ行音・ラ行音を同じ程度に混同する。

次に、調査Ⅰ、Ⅲの調査結果を踏まえて、成都・重慶方言の音韻的特徴がナ行音・ラ行音の生成混同にもたらす影響について考察し、以下の3点を明らかにした。まず、成都方言に関しては、①洪音の場合/l/・/n/の弁別がなく、細音の場合のみ/l/・/n/を弁別するため、日本語のナ行音・ラ行音の生成においても後続母音が/i/の場合、ほかの後続母音よりも混同しにくい。一方、重慶方言に関しては、②洪音・細音に関係なく/l/・/n/を弁別しないため、日本語のナ行音・ラ行音の生成においても後続母音に関係なく混同する。③/l/・/n/をラ行音に近い音で発音する場合が相対的に多いが、ナ行音に近い音で発音する場合も存在するため、ナ行音とラ行音を同じ程度に混同する。なお、成都方言話者は生成において、ナ行音よりもラ行音のほうが混同しやすいことに関して、「過度修正」の可能性について推測した。

続いて、調査Ⅱ、Ⅲの調査結果を踏まえて、ナ行音・ラ行音の知覚混同および生成混同の関係について分析・考察し、以下の2点を明らかにした。成都・重慶方言話者ともに、ナ行音・ラ行音の知覚・生成において、①生成よりも知覚のほうが混同しやすい。②知覚と生成との間に中程度の正の相関がある。

最後に、本章をまとめた。

◆ 第七章 結論

第七章では、本研究のリサーチクエスチョン (RQ) および研究目的に対する答え、日本語教育への示唆、今後の課題を提示し、本論文をまとめた。

まず、RQ1、RQ2、RQ3に対する答えを述べた。それを踏まえたうえで、本研究の研究目的が達成され、若年層の成都・重慶方言話者の母方言の音韻的特徴が、日本語のナ行音・ラ行音の知覚・生成混同にもたらす影響を5点明らかにした。

- 成都方言話者に関しては：
 - ① 母方言の音韻的特徴が日本語のナ行音・ラ行音の知覚・生成にも影響を及ぼしている。つまり、方言においては洪音の場合/l/・/n/の弁別がなく、細音の場合のみ/l/・/n/を弁別するため、ナ行音・ラ行音においても後続母音が/i/の場合、ほかの後続母音よりも混同しにくいのである。
 - ② また、方言においては/l/・/n/をラ行音に近い音で発音する場合と、ナ行音に近い音で発音する場合が混在するため、ナ行音・ラ行音の知覚においてはナ行音とラ行音を同じ程度に混同する。
 - ③ ただし、ナ行音・ラ行音の生成においてはナ行音よりもラ行音のほうが混同しやすく、過度修正の可能性が考えられる。
- 重慶方言話者に関しては：
 - ④ 母方言の音韻的特徴が日本語のナ行音・ラ行音の知覚・生成にも影響を及ぼしている。つまり、方言においては洪音・細音に関係なく/l/・/n/を弁別しないため、ナ行音・ラ行音においても後続母音に関係なく混同するのである。
 - ⑤ また、方言においては/l/・/n/をラ行音に近い音で発音する場合が相対的に多いが、ナ行音に近い音で発音する場合も存在するため、ナ行音・ラ行音の知覚・生成においてはナ行音とラ行音を同じ程度に混同する。

次に、本研究の成果に基づき、日本語教育への示唆を5点述べた。具体的には、①音声習得における母語・母方言の転移を探究するにあたって、調査協力者の母語・母方言の発音実態の把握が必要である。②方言間だけでなく方言内の差も考慮に入れ、下位方言まで細分化して研究すべきである。③母語別だけでなく、方言別の練習方法の開発も必要である。④成都方言話者の母方言の「正の転移」を生かした「ニ・リ突破法」を提言した。⑤重慶方言話者向けの練習方法上の留意点をいくつか指摘した。

そして、今後の課題として、①「ニ・リ突破法」の実践研究、②成都方言話者が知覚において「ナ・ラ」が相対的に混同しやすい問題に関する追跡調査、③学習者の意識および習得過程に関する研究、という3点を挙げた。

最後に、本論文をまとめた。

以上をもって、本修士論文の概要とする。